INFORMATION

シアトリカル應典院舞台芸術祭
SPACE☒DRAMA
2000

いよいよ1月7日より、舞台芸術祭が始まります。
今回は、特に出演する劇団とともに創りあげる演劇祭として、他の小劇場にはない、新しいスタイルを模索します。
主に、演劇が出し物となりますが、それぞれの公演の中で、シンポジウムを開催。自分たちの演劇に対する考えを、語り合います。
地域のこころの文化交流の一環として、この舞台芸術祭にとりくんでいきたいと考えています。

Line Up

T. M. R. プロデュース
『モンテカルロの雪降る一月』
1月28日（金）19:00
29日（土）15:00／19:00
30日（日）13:00／17:00
前売1500円
当日1800円

メロディアスメロン
『ガリバーのうなじ』大改訂版
2月11日（金）19:00
12日（土）14:00／19:00
13日（日）13:00／17:00
前売1500円
当日1800円

The Stone Age
『未定』
2月18日（金）19:30
19日（土）14:00／19:30
20日（日）13:00／17:00
前売1800円
当日2000円

クロージングプログラム
2月27日（日）
①津村卓氏　講演会
②演劇ワークショップ

南船北馬一団
『ほら　そら　ごらん』
1月8日（土）19:30
9日（日）15:00／19:30
10日（祝）13:00／17:00
前売1800円
当日2000円

売込隊ビーム
『お気楽ショートストーリー集』
1月21日（金）19:00
22日（土）15:00／19:00
23日（日）13:00／17:00
前売1500円
当日1800円

年末は恒例のの年忘れ交流会でワイワイガヤガヤ

12月26日、應典院主催・自分感謝祭の2回目終了後、恒例の『年忘れ交流会』を開催します。
1000年代最後の年末を、ぜひみんなで盛り上げたいと思います。会員の方はもちろん、お友だちもお誘い合わせの上、自分感謝祭と併せて、ぜひご参加ください。

○日　時　12月26日（日）
自分感謝祭2回目（18時～）終了後
○参加費　500円
※食料品一品をご持参ください。

【新入会員ご紹介】
（1999年12月10日まで）
○一般会員
【大阪府】
奥野　美鈴
【京都府】
坂本　　充　京都市山科区
○学生会員
【大阪府】
森　　雅寛　和泉市
高松久美子　大阪市西成区
会員総数187名

サリュ VOL. 17
應典院寺町倶楽部のニューズレター
発行日　1999年12月10日
（偶数月発行）
編集人　池野　亮
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543－0076
大阪市天王寺区下寺町1－1－27
TEL06－6771－7641
FAX06－6770－3147

Salut

［サリュ］
フランス語で救いの意

1999 DECEMBER
vol. 17



世間では、ミレニアム流行らしい。記念イベント、記念グッズ……、テレビでも最近とくによくこのことばを耳にする。ミレニアムとは千年に一度の年という意味で、欧米ではキリストの生誕から千年ごとを祝う大切な節目として考えられている。なんで日本人がそんなに騒ぐのか。
日本でも、五節句など、節目節目の行事をたいせつにしてきた。大晦日を迎えると一年を振り返り、年が明けるとあたかも生まれ変わったような気分になる。
しかし、よく考えてみると、一日一日、一瞬一瞬が自分の人生の中で、ただ一度のこと。毎日の中で、いのちの不思議さ、大切さを考えてもいいのではないだろうか。

EVENT REPORT

寺町倶楽部秋の大イベント
「いのち」をテーマにNPOが集合、コモンズフェスタ'99がにぎやかに開催さる!!

昨年に引き続き、今年も秋のお祭り『コモンズフェスタ'99〜いのち、めぐりあうとき』(第8回大阪生涯学習フェスティバル協賛事業)を開催しました。今年のコモンズフェスタのテーマは、いのち。11月3日〜11月14日の2週間にわたって、「福祉」「まちづくり」「教育」「司法」「国際協力」などの多彩なNPOが、いのちをテーマに生と死、くらし、仕事、権利についてのそれぞれの企画を持ち寄った、ネットワーク型のイベントとなりました。

期間中来場者は、昨年の600名を大きく上回ってなんと約800名! それぞれの企画が新しい出会いを生み、たいへんにぎわった2週間でした。

今年のコモンズフェスタは、10月26日からプレ企画である李東桓写真展『生きたい』でスタート。

タイのプラバートナンプ寺院におけるエイズホスピス活動を撮影した写真約40点を展示。いのちの尊さを訴えかけるその写真は、来場された約300名の方々のこころに、さまざまなメッセージを残しました。

いよいよのオープニングは11月3日。フォトジャーナリストの李東桓さんがわざわざこの日のために韓国から来日。李さんの他には、アクセス21、シェアなどのタイでエイズ救援活動にかかわるNGOスタッフをゲストに、トークライヴ『いのちにふれるとき〜レンズが覗いたエイズの現場』を開催、タイにおけるエイズ事情や日本に暮らす私たちのいのちについて熱い思いが語られました。

ライヴ終了後のオープニング交流会には、参加NPOの実行委員や一般の参加者が50名ほど集い、コモンズフェスタの始まりを飾る、笑顔いっぱいの楽しい出会いの場となりました。

その後、NPOとこれからの生き方を考えるシンポジウムやオーストラリアのセラピストによる死の講座、力強く障害者を描いた記録映画『んんとこ』の上映会などユニークな企画が連日開催されました。

12日には、今年2月の寺子屋トークにお越しいただいた、演出家・療育家の竹内敏晴さんが再登場。『死に照らされた生』と題し、自らの半生を振り返り、家族の死にまつわる経験



などをお話しいただきました。こころの奥底に響くことばのひとつひとつに、参加者は熱心に耳を傾けていました。



寺町倶楽部主催による、コモンズフェスタ'99記念トークセッション・第20回寺子屋トーク『日本人の死に方大論争!〜人生の総決算、あなたはどう考える?』は13日に開催。医療、民俗の立場から、日本人の死生観に白熱した議論を展開、会場は大いに沸きました(詳細の報告は7頁)。

同じく13日、司法NPO〜当番弁護士制度を支援する会・大阪主催の『裁判官って身近ですか?』は、現職裁判官と市民が語り合う初の試み。市民からは、遠い存在と感じがちの司法の世界。会場からは、「裁判官の趣味は何ですか?」などの質問も飛び出すほど。この催しをきっかけに、司法が開かれたものになることを期待します。

14日、ファイナルを飾ったのは『いのちを感じる、語る、考える』。午後には、子どもたち対象のスタンプラリー。未来の自分の姿を描いてみたり、地球上で絶滅寸前の動物たちの紹介など、工夫をこらされたポイントの数々は、人間だけでなく、地球上すべてのいのちを考えるきっかけになっていくのではないでしょうか。



夜には、大阪YWCA教育総合研究所の金香百合さんの『いのちを語る』ワークショップ。厳粛な雰囲気の中で進む中、人と人とのいのちのつながりを感じる、濃縮した時間を過ごすことができました。

2週間に15のイベントを繰り広げた『コモンズフェスタ'99』。さまざまなNPOの参加で、多くの新しい出会いがうまれました。来年は、どんなコモンズ空間がうまれるのでしょうか。

ありがとう、いのち

『生きたい』実行委員　田原優子

プレ企画の写真展、オープニング企画のトークライヴの実際の企画、運営には、大学生を中心とした実行委員会があたりました。

その経験の中で、彼女たちの中にいろいろな「気づき」や「学び」があったようです。その気持ちを『生きたい』実行委員会の田原優子さんが語ってくれました。



ひとりの少女の瞳があまりに切なかった。エイズに冒され、細る身体の父親にほほを寄せ、小さな手足でぎゅっと抱きしめながら、こちらを見つめる——そのまなざしを私は忘れまい。

父の「生きたい」と子の「生きてほしい」、ひとりの人間としてたったひとつの生に対する声なき叫びが伝わってくるようだった。写真に、いのちがふき込まれているのだと強く意識した瞬間だった。

今回、『生きたい』実行委員会としてこの企画に携わることができたことに深く感謝している。そして、もし私があのときかかわらずにいたら、何も知らず、誰とも出逢えず、私自身のいのちとさえ真剣に対峙することなく、そのままあたりまえに日々を過ごしていたかもしれない。

李さんがレンズを通して覗いたタイのエイズホスピスの現場は、いのちにふれる尊さと厳しさを真っ正面から問いかけ、深い学びを与えてくれた。

じっと一枚の写真の前から動こうとしないおじいさん、涙をぬぐいながら進んでゆく女性、わが子の手を引きながら静かに語りかけるお母さん、そこにはさまざまな姿があった。

たとえタイという遠い国の知らない人だとしても、写真と向き合う人と人とのかかわりに、静かな心の躍動を垣間見た気がする。そこには、国境をも越えて同じいのちを授かる者どうしだからこそ、放っておけない、他人事とは思えないという感情が流れているのではないだろうか。

いのちはすべてつながっているのだという願いに、熱い想いがこみ上げてきた。

トークライブにわざわざ来日して出演してくださった李さんが、最初にこう話されたのを覚えている。「写真家である前に、私はひとりの人間として彼らに向き合いたかった」と。

この『生きたい』写真展が、人々の心に届いたのだとすれば、何も装うことのない人間と人間のはだかのいのちを映し出していたからではないだろうか。

父に寄り添い、いまを懸命に生き抜こうとする少女のまっすぐな瞳。その奥にはきっと明日がある。未来がある。いのちが生きている。



▲写真左下が田原さん

コモンズフェスタ
記念座談会

それぞれの場について語りあおう
コモンズ空間によせる想い

さまざまなNPOが独自の企画を持ち寄り、たくさんの出会いを生んだコモンズフェスタ'99。

第20回寺子屋トーク『日本人の死に方大論争!』のゲストにお越しいただいた、大阪外国語大学助教授の森栗茂一さん、『もうひとつの働き方〜NPOからのメッセージ』と題したフォーラムを主催された、NPO法人シンフォニー事務局の野崎清美さん、そして應典院インターンで、プレ企画李東桓『生きたい』写真展にかかわった杉原幸恵さんに、コモンズについて語りあっていただきました。

NPOの時代

野崎●阪神淡路大震災からもうすぐ5年が経とうとしている今、あのときのボランティアのものすごいエネルギーは一体何だったんだ？　と思います。

あの震災でのボランティアという非日常的な現象は、私たちの日常生活の中にあるさまざまな問題を浮かび上がらせたと思います。そしてこの不況で、会社に入れば安定した生活が得られるというこれまでの常識が通用しなくなってきています。

杉原●そうですね。日常にどっぷりと浸かっていては、問題点に気づかないでいることがよくありますよね。

野崎●不安定な時代が背景にあるのか、「誰のために、何のために仕事をするのか」と、働くことと生きることの意味を考えて、仕事の方向を営利から非営利へと変えていく人が増えてきています。

そこで、社会的公益性という自分と社会とのかかわりを、働き方というものを通して考えようという企画が、今回の『もうひとつの働き方』だったんです。議論としては空中分解した感じになってしまいましたが……。

森栗●なかなかおもしろい企画ですね。これを1回で終わらせないで、集まった人たちのネットワークを広げていけば、あちこちでさまざまな活動につながっていくと思いますよ。

野崎●中には法人格を持っているところだけがNPOだと思っている人もいますが、もちろんそれだけではありません。



▲『日本人の死に方大論争!』では、4名のゲストを迎え、現代の死のあり方、死に対する考え方について語り合った。

非営利というのも、ただ営利に対して非と言っているだけであって、他には何も言っていないので、実際はどんな実態をつくるのかということの方が問題ですよね。営利の中で問題となっていることに対してどれだけ応えられるのか。

森栗●それにはまず、覚悟大会が必要ですね。3段階です。まず覚悟をきちんと決めることが重要で、その後にそれをどうやって具体的に動かしていくのかという働きがある。そして次に、その働きをうまくさせていくための技術が必要となってくる。



今の時代のNPOは、まだ覚悟をしっかりしなければいけない段階ですね。

杉原●私たちの世代って、生まれたときから何もかもがそろっている。何かを得るために覚悟するという感覚が乏しいように思います。

野崎●そうですね。確かに今の傾向としては、覚悟を決めて何かをやろうという人はあまりいない気がします。自分が今やっていることがおもしろくないから、違う動きに魅せられるという感覚が強いと思います。

森栗●そうそう、今はそういう時代ですよ。でもこれは自然に淘汰されていきますよ。続かないでしょう、そんな考えは。

野崎●ボランティアと一緒にやっていこうと思うと、人によって自分の得たいものと捨てられるものが違うので、みんなを一律の意識で見ることはできない。

それを認めあった上で、単なる分業ではなく、どう働くのか、どう生きていくのかを考える価値観の部分が大事だと思います。

森栗●俺はここまでしかできへんぞ、というのを伝えることも一種の覚悟です。自分の位置をきちんと決めるということ。

それぞれができる役割は本当に限られていて、お互いがひとつの組織の中で話しあってこうしていこうという、団体としての覚悟が今度は必要になります。今あるNPOはどこもこの部分がまだばやけている。やりたい人がやる、いわゆる素人NPOです。変な言い方ですが、プロのNPOにならなければいけない。

杉原●non－profitのプロですね。

今時代は、どの職業でもプロ意識が欠けているとよく耳にします。特にNPOは、プロ意識を持ちにくい集まりのような気がします。

野崎●そうですね。そういう意味では、私たちの団体もまだ少し弱いところもありますが、今集まっている人たちは、お互いに夢とか目的とか、今はないものだけど絶対につくっていこうというものを共有してつながっています。そして日常的には、事業を企画したり、お金の計算をしたり、やっていることは企業と変わらないわけですよね（笑）。

だけど、そこで何のためにやっているのかということを考えます。これは意味を問う作業です。これを自分で確認しつつやっていくというのが大切ですよね。





森栗茂一さん
大阪外国語大学助教授都市民俗学
① 1954年生まれ、②極度O系のA型、③夏冬キライ・秋はめんどくさい・春はうっとうしい、④自称盛り場の権威・3分間息止め

野崎清美さん
NPO法人シンフォニー事務局スタッフ
① 1974年生まれ、②O型、③夏がすき、④素潜り



①生年、②血液型、③好きな季節、④自慢できること

ネットワークの中で

杉原●実は、私自身も仕事を辞めて應典院に来ました。いろんなことを考えましたが、働くことはただ食べていくことではなくて、それを通して社会とかかわる自分がいきいきしていたいと強く思いました。お給料ではなくて、自分の満足度で人生を考えたいと。働く意味を考えて、葛藤の末に辞めました。それって、やっぱり覚悟なのかな（笑）。


『もうひとつの働き方〜NPOからのメッセージ』は、「社会的公益性に組織の存在価値を置く民間の組織＝NPOが注目されている意味を、働き方の面から考えたフォーラム。

職場を出るという結果に至ったのは安直だったかもしれませんが、そのおかげで應典院にも出会えて、世界も広がるという大きな転機になったわけです。

森栗●そうですか。今、錦の御旗はやはり社会に対して、自分はどんな働きかけをするのかということを、一人ひとりが問われる方向に向いています。

そしておもしろいことに、10人のうち3人が動こうと思えば、社会は確実に変わります。

ということは、女性の2割から3割が今動こうと思っていますから、後は男性がもう一人くらい動けば、もうすぐですね。すごく近いですよ。

杉原●應典院での出会いの中で私が魅力を感じた人たちは、みんなある種の覚悟を持って生きているような気がします。おもしろいことをやっている人は、時間や場所の使い方がとてもフレキシブルで、ないのは一様にお金だけ（笑）。

でもその分、頭と足をフルに使って、確実に思いを伝えたり人を魅了したりしている。そして、そういうおもしろい人に限って、ネットワークがすごく広くて、しかも別々の広いネットワークどうしは必ずどこかでつながっている。

森栗●應典院にインはしたけど、ターンはもすごく大きいね。社会の中では、どこかの組織に所属して幅をきかせている人が大多数であって、そういうネットワークの中で泳いでいる人は少ない。でも、物事は数じゃないんですよね。

杉原●その人たちとの出会いを通して、まだはっきりとこの先自分に何ができるのかはわからない私にも、自分の方向はこれで間違っていなかったんだと思うことができました。

それに、この世界はまだ社会的に



杉原幸恵さん
應典院インターン
① 1976年生まれ②B型、③秋、
④自称筆まめ・個人通信を発行

は脆弱かもしれないけれど、すごいパワーを持っていると感じました。
森栗●これは、コモンズの世界ですよ。

コモンズのイメージ

杉原●私は、コモンズというと、行政ではなく、そして当事者団体のようなものでもないものをイメージします。それは、どちらも概して単一的、画一的な価値観でなっているからです。

だから、いろんな団体があって、いろんな価値観が入り混じってそれらが交流しあう中で共通概念のようなものをつくっていけるような場を、私はコモンズとイメージしています。

そこでは正しいことはひとつではないかもしれないけれど、誰もが同じ大きさの力を持って話し合える。
野崎●実はシンフォニーという名前は、そういうことをイメージしてつけたんです。交響曲。ひとつの音を個とすると、ひとつのメロディーはひとつの音ではつくれないですよね。ひとつひとつの音がそれぞれに鳴ることで、それらが重なり合って響きあって初めて曲ができます。

そして、交響曲の中ではメロディーはどこから始まってどこで終わるのかを説明するのは難しいですよね。いろんな音が重なりあい響きあっていて、でもそれが聴く側にとってはひとつの音楽としてある。こういう人間関係や社会を理想としています。

一人ひとりが自立し、それらがかかわりあってひとつのものを作り上げる。
杉原●いいネーミングですね。森栗さんのコモンズに対する考えはどうですか?
森栗●これからは、企業も地域社会に貢献していくNPO化にだんだんなってきますよ。本来企業とはそういうもので、利益をどうやって社会に還元していくのかという、企業のコミュニティ観みたいなものを持っています。コミュニティの中で役割を果たしたいという、企業市民ですね。

それから、住民もただ恩恵を受けているだけではなくて、一人ひとりがいろんな顔を持って社会へ働きかける自立した市民になることが求められている。
野崎●一人ひとりの意識が大切ですね。
森栗●私は、正直言って日本人はこれまでにコモンズというものを持ったことがないと思います。常にお上に頼って、会社にも頼って、完全に依存体質できましたから。

でも、本当は自分のことは自分でする、自立して社会と自分との距離の取り方を考えて生きることの方が普通なんです。みんなそれに、少し気づき始めたんですよ。
野崎●震災にときに、お上が必ず助けてくれるというお上幻想は見事に崩れましたからね。
杉原●そうですね。
森栗●やはりそれぞれが違う意見を持って、違う意見はおもしろいと感じつつ、その違う人どうしがひとつの目的を持ってどうやってつながることができるのかが問われているんです。しかも一人ひとり役割が違いますから、いろいろあっていい。こういうコモンズを前提にした動きがひとつある。

それから、こういう仲間はあまりしょっちゅう顔をあわせられないので、一定の地域の中でつながって活動をする地域コモンズ的なものには大きな意味があります。

もうひとつ、NPOには中間セクターのようなものが重要なんですね。たとえばたくさんあるNPOを全体的に支援したり、場所貸しをしたり、人材育成をするようなもの。
野崎●それは本当に必要ですね。

中間セクターとしての應典院

森栗●僕は應典院は、中間セクターとしての役割がおもしろいと思う。
杉原●應典院は、中間セクターなんですか?。
森栗●そう。それも、誰でも何でも使ったら、いろんな人がつくったらいいよという精神で、町の中にこういう場があるというのが素晴らしい。こういう場所にはいろんな人が集まってくる。そして、やはり北からも南からも来やすい便利な場所にあって、いろんな人が出会いやすいということは重要です。

現在の人間の気持ちがここでつながるというのと、過去の大阪のいろんなおもしろい町人文化をつくってきた人たちの思いが見えない糸でつながっているのではないか。意識はしていないけれども、きっとどこかに働いていると思います。



▲『いのちにふれるとき』は、李氏の写真に込めた思い、撮影の意図やタイにおけるエイズ事情、日本で暮らす我々にとってのエイズやいのちの問題について、語り合った。

我々は勝手に生きているのではなくて、どこかに過去の人たちの思いを引き受けている存在なんです。コモンズというのは、ひょっとするとヨコにもタテにも広がっている。
杉原●いのちのつながりというのは、今生きている人のヨコのつながりだけでなく、過去からつながってきて、そして未来へつながっていく。
森栗●高校生たちは今真剣に考えていますよ。これからの世の中どうなっていくのか。
野崎●それは私も感じますね。全員がそうとはいえないけれど、彼らはとてもシビアに現実を見ていると思います。
森栗●そう、やはり彼らに対してきちんとこんな新しい生き方もあるんだと、示していかなければいけない。彼らが動こうとしたときはきっともっとおもしろい。世の中もっとガラッと変わりますよ。

そのとき、應典院がそういう過去にも未来にも現在にもクロスする中間セクターであればいいなと思いますね。
杉原●おもしろいですね。人々の意識が変われば、建物にこだわらず、地域というゆるやかなくくりの全体が、コモンズ空間になるのではないでしょうか。
野崎●應典院は、行政施設である公民館とはひと味違う。町の中にこういう場がない地域からみたらうらやましいと思いますよ。欲しいです。
杉原●私が感じることは、ここには強制力がないということです。来いといわれて、絶対に来なければならない場所ではないし、行かなくても何の支障もないんですよね。

それでも人が集まるというのは、それは自発的な人の動き。自発的な思いで空間がつくられるというのは、あたりまえだけれども、現代社会の中ではなかなか難しくて、そして楽しいことだと思います。
森栗●楽しいということが大事ですね。おもしろいことは重要です。みんな好きだからやっているんです。
野崎●そうですね。たとえば人に説得力を持つ言葉なんていうのは、結局は「絶対おもしろいからおいでよ」なんです。

理論でこれが大事だとかこうせねばならないというのは、大多数の人に大きく受けるんですが、最後に誰も集まらないということもありえる。そういう意味で、強制力ではなく人が集まるという空間はそんなにはないと思います。

どんどん可能性が広がりますね。



自分らしい死に方とは…… 第20回寺子屋トーク

去る11月13日、第20回寺子屋トーク『日本人の死に方大論争!〜人生の総決算、あなたはどう考える?』を開催しました。

ゲストには、大阪大学教授で浄土真宗僧侶の大村英昭さん、社団法人コミュニティ・ネットワーク協会理事長で医師の神代尚芳さん、大阪外国語大学助教授の森栗茂一氏さん、コーディネーターには繁昌花形本舗代表の塚村真美さんをお迎えし、第1部ではパネルディスカッションが、第2部では会場からの質問をもとに議論が展開されました。



大村さんは、葬儀・墓石・自然葬・戒名料問題などにいろいろな批判や意見が高まってきている現状を、多くの事例を用いてわかりやすく、かつおもしろく示されました。またそれは一般市民の死に対する意識の昂揚であり、自分らしい死の模索が行われていることの現れであると述べられました。

神代さんは、死を目にすることが少なくなった現代では、管理されない死は人々に恐怖を抱かせるため、一般的な人々は病院という管理の中での死を望んでいると指摘されました。また、在宅での死を看取る活動の経験から、死が医療化されて医者に任されている現状では、自分らしい死というものが存在しないとの危惧を語られました。

森栗さんは、神戸の仮設住宅でのボランティア活動やまちづくりを進める経験から、安心して在宅で老いることのできる家族・地域・社会・システムをつくることの重要性について述べられました。また、死に方のいろいろな選択肢が消費のチョイス、商売として存在していることについての問題提起もされました。

医療技術の進みすぎた現代では、死のイメージを磨いていくことが死を醜くしないことにつながっていきます。一人ひとりが死に対するイメージトレーニングを重ねていくことが大切である、というのがみなさんの一致した意見でした。

会場は、終始笑いの絶えない明るい雰囲気につつまれ、その中で参加者それぞれが死について真剣に考えるきっかけを持つことができたようでした。

(取材/文　平澤知春)

市民活動
サポート事業

特定非営利活動法人　関西こども文化協会

まんまくらぶ活動報告

子育てサークル『まんまくらぶ』は、こどもの権利条約を理念とする、NPO法人『関西こども文化協会』の子育て支援事業の一環として、1999年4月に発足しました。

『まんまくらぶ』の由来は、こどもの”ありのまんま”を受け入れ、おとなも”ありのまんまの自分”で交流していきたいとの思いをこめています。乳幼児期から学童期のこどもをもつ親を中心に、子育てを通して見えてきた社会や教育の問題、また一人の市民としてどう生きていくのかなどを、定例会の中で話し合うことを軸に活動しています。

子育てを考える際、親子関係だけでなく学校や地域社会との連携も含め、社会教育としてどうとらえていくかを課題としています。たとえば、親子や夫婦のコミュニケーション不足、学校・幼稚園・保育所における教育環境の整備の必要、マニュアル世代からくる工夫と経験の不足などを、個人のレベルだけで片付けずに、自分たちの暮らす地域にも問題として投げかけていきます。

親子が孤立して子育てをしているがゆえに、悩みは深くなっています。集える場所やつながりを地域でつくっていくことで、安心して子育てができる状況をつくりだしたいと考えています。このことは、地域を今一度とらえ直し、新たな”まちづくり”にも欠かせないことと受けとめています。

定例会の他にも、親子で参加できる催し、子育て講演会や学習会などを行っています。11月には、應典院を会場に、親と保母が互いに子育てを通して学びあい、地域ぐるみの子育てを実践しているアトム共同保育所所長代理・市原悟子さんの講演会を開催しました。「子育て競争にはまっていませんか」のテーマで、今の親たちが抱えている子育ての背景から、こどもの発達に応じた育ちをとらえ直すこと、また必要以上の早期教育に対する問題提起を受けました。

今後の展開としては、来年1月16日、應典院で「カプラ」というフランス製の数千個の積み木を使ったワークショップを開催します。まんまくらぶのメンバーに加え、関西こども文化協会・ジュニアのこどもたちも参加して、異年齢の取り組みをしていくことで、こどもと一緒におとながどう遊べるのか、遊びを通しての関係づくりを考えていきたいと思っています。そして、現在、東住吉を拠点としている『まんまくらぶ』を、市内全域や府下に展開していくことを考えています。

『まんまくらぶ』の理念を柱にして、その地域に応じた子育てサークルが各地にできればと考えています。そして、各サークルの活動をサポートし、ネットワークをはかり、日頃の活動の交流や子育て学習会をやっていきたいと考えています。

そのネットワークの拠点として、應典院があり、出会いとつながりの場としてまんまくらぶメンバーが集い、寺町倶楽部とも活動を共にして相互に交流できれば、更なる活動が展開できるのではないかと考えています。

『まんまくらぶ』に関する問い合わせは下記まで。
特定非営利活動法人
関西こども文化協会
TEL 06－6701－9292
FAX 06－6704－7918

VOICE ボイス

今回のVOICEは、吉水幸也さん。吉水さんは、神戸の浄土宗徳本寺のご住職で、秋田住職が代表を務めるアーユス関西の事務局長でいらっしゃいます。今回のコモンズフェスタには、プレ企画の写真展、オープニングのTALK LIVEを主催されました。今回の企画を通して感じたことをお聞きしました。



今回の『コモンズフェスタ』に、私たちアーユス関西もプレ企画の写真展と、オープニング企画のTALK LIVEで参加しました。といっても、実際の運営は、学生を中心とした実行委員会を結成し、彼女たちにまかせっきりでした。

若さゆえの経験の浅さを、秋田住職からのゲストの紹介や数回のレクチャーなどのサポートに、ずいぶん助けられたと思います。しかし、彼女たちにとって、はじめてのタイプの試練を、あふれんばかりの情熱で立派にのりきったように思います。

会うたびにどんどんたくましくなっていくんです、彼女たちが。人って、やっぱりいろいろな経験を通して成長していくんですね。人材を育てることの大切さと難しさをあらためて感じた今回のイベントでした。

彼女たちは、今回の実行委員会での経験を通してAsian HeartというNPOまで立ち上げました。若い人たちのパワーはすごいですね。

應典院には、本来あるべき社会の縮図のように、いろいろな方々が（たとえば社会人や学生、ポリシーや芸風の違いを持ち、また異なる宗教を持つ人たち・障害を持つ人介護する人等など）あたりまえに出入りしていています。日常的にいろいろな人が出入りするのが、この場のもつ魅力なんでしょう。

世の中が多様化する昨今、人ひとりの経験がともすれば希薄に感じられてしまいがちです。人と人とが、求めさえすれば出会えるチャンスが非常に多くあるこの場は、貴重であり、今後このような場が増えていくことが大切ですね。

應典院から、新たなネットワークが生まれることを切に期待します。

秋田住職発 應典院掲示板

はやくも師走――。應典院では最近いきいきとした若い人たちとの出会いが続いています。

たとえば『生きたい』の写真展の実行委員会のみなさんは、元気な女子大学生。1年前のTさんとの出会いがきっかけとなり、その仲間たちが集って、立派な写真展を成功させました。住職として多少のお手伝いはしましたが、彼女たちが自分たちの場を持ち、そこに世界を描き出すプロセスは、傍目で見ていても、わくわくするものがありました。人はひとりでは成長できない。他者とさまざまな関係性を編み出しながら、やがてそれが壮大なコラボレーションとなっていく。

演劇やボランティアも同じこと。強いていうなら、そういう場のカオス（混沌）が、若い人をいきいきさせる元気の源かもしれませんね。

子ども七五三法要厳修

去る11月4日、晴天の下、應典院で2回目となる『子ども七五三法要』が開かれ、9名の子どもたちとそのご家族が参詣されました。

神社に対抗するわけではありませんが、人生のハレの儀式をお寺でも、と作法は古式豊かに、演出は現代的に、と両方マッチした内容。堂内には、赤い毛氈が敷き詰められ、オルガンの演奏の中、子ども一人ひとりが献花するなど、雰囲気たっぷりで、若いご両親にも好評でした。

大阪都市景観賞奨励賞を受賞

このたび新聞発表がありましたが第19回大阪都市景観建築賞（大阪まちなみ賞）の奨励賞を應典院が受賞、12月10日に表彰されることとなりました。

これは大阪市・府・府建築士会が主催する権威あるもので、築1～5年の建物を対象に、225の候補の中から審査委員会が決定したもの。今年の知事賞には、くずはローズ幼稚園、市長賞には扇町キッズパークが選ばれています。

20年に及ぶまちなみ賞で、寺院が選ばれたのは、これが初めて。

法然上人25霊場で秋の洛北へ



恒例の應典院・大蓮寺合同の『法然上人25霊場巡拝団』、今回6回目は、去る10月24日、大原から比叡山と秋の洛北を巡りました。参加37名。

法然上人が青年時代に修行に励まれた黒谷・青龍寺、また天台宗の碩学と論戦を交わした勝林院など、浄土宗にとっては重要な遺跡。おなじみの顔ぶれの中に、若い初参加の方もあり、同行二人、ゆったりと秋の旅路を満喫しました。

次回は来年5月の予定。どなたでも参加できます。

労金のNPOフォーラムに出講

時代は変わって、いまや労働組合もNPOをまじめに研究する時代。去る11月6日、近畿ろうきん（労働金庫）が主催するNPOフォーラムのセッションにパネリストのひとりとして出講、錚々たる大企業の労組幹部のみなさんを前に、應典院の活動について語りました。

今年の講演は、12月3日、生野区地域女性セミナーで「まちづくり」、12日には東京のオリンピックセンターで『国際子どもフォーラム』と、それぞれ続きます。

年末年始のお知らせ

應典院の今年最後のトークサロンは、12月8日の19時から、27日には恒例の自分感謝祭と年忘れ交流会（下記参照）、31日23時には大蓮寺で除夜の鐘があります（誰でもつけます。先着順）。

お正月4日までは、應典院の事務所はお休み。

5日から平常通りです。

歳末恒例・自分感謝祭は12月26日に開催!!

恒例の自分感謝祭は、例年通り12月26日に開催します。

この儀式は、今年一年をふりかえって、自分の行いを懺悔する、應典院だけのオリジナル法要。一人ひとり、懺悔のカードを仏前で浄焚（聖なる火）にくべ、新年の新たな出発を誓います（住職からのファイナルメッセージもあります）。

毎年、「心が洗われた気分」、「自分自身にご苦労さんと言いたい」、「世界が広がった経験がうれしい」など、たくさんの感動を招きました。

荘厳なオルガンの演奏の中、光につつまれながら、一年の終わりにふさわしい「鎮めの儀式」を堪能してみませんか（写真は昨年の様子）。



なお、18時からの夜の部は、終了後に『年忘れ交流会』を開催、持ち込み歓迎ですので、こちらもふるってご参加ください。

◎應典院主催／寺町倶楽部協力
12月26日（日）　①14時～
②18時～
参加無料（交流会は参加費500円）
数珠をご持参ください。
申込みは、TEL 06－6771－7641まで